様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３４７１

研究課題名（和文）An Affective Anthropology of Physical Movement and Human Experience in the Case of Pole Dance as Sport, Art, and Entertainment in Contemporary Japan

研究課題名（英文）An Affective Anthropology of Physical Movement and Human Experience in the Case of Pole Dance as Sport, Art, and Entertainment in Contemporary Japan

研究代表者
ＣＯＫＥＲ　Ｃａｉｔｌｉｎ・Ｃｈｒｉｓｔｉｎｅ（COKER, Caitlin）

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：３０８２２７５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、性風俗のエンターテインメントであったポールダンスがどのように一般的なフィットネス、スポーツの競技、芸術的な表現の一形態として多様化してきたのかを調査し、複数の種類のポールダンスを実践者と共に実践することによって、研究者自身がポールダンスの身体経験の内実を明らかにした。そして、実践の身体経験とその際の情動を本研究の対象・方法・発表形態とする本研究独自のアプローチを通して、人類学における情動と生成変化、場所、エロス、痛み、ジェンダーを巡る人類学的な理論を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現代日本におけるポールダンスを事例にし、言語では表しきれないが身体で感じ取れる身体経験の内実を示し、身体的な実践と思考を乖離させない理論形成を行い、言語以外の伝達手段を用いた研究発表形態を提示した。特に、研究者自身が本研究の考察をもとにダンス作品を振付・演出・出演することで、学術的な研究の発表形態が言語化されたものに限るというバイアスを問い直し、非言語的な身体的なパフォーマンスを取り入れた新たな学術的発表形態の分野を切り拓いた。

研究成果の概要（英文）：This research clarified how pole dance, which started as a form of erotic entertainment, diversified into a form of fitness, sports competition, and artistic expression. The researcher understood the physical practice of these different kinds of pole dance by experiencing it firsthand with her own dancing body. This research contributed to the anthropological theory of the body by developing theories on affect, becomings, place and space, eroticism, gender, intersectionality, and connection. This was achieved through a novel approach using the physical experience of practice and the affect that arises from that practice as the subject, method, and transmission of research.

研究分野：文化人類学

キーワード：身体　ダンス　身体運動　芸術　舞踊　情動　ジェンダー　身体経験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の調査地である現代日本のポールダンス業界では、ポールダンスの実践が 30 年間に渡って多様化してきた。具体的に言えば、1990 年代には性風俗のエンターテインメントであったが、2000 年代から競技の一種となり、フィットネスおよびスポーツとして一般的に実践されるようになった。現在のポールダンスは、スポーツ競技の一種であると同時に、ダンスと身体表現でもあり、舞台芸術としての可能性も国際的に繰り広げられている。ポールダンスは欧米で始まったが、日本のポールダンス業界はこの多様化において重要な役割を果たし、現在でも世界のポールダンスをリードしている。以上のことから、研究対象とされてこなかった日本におけるポールダンスの歴史と現状は研究対象に値するものであると考える（Paul Dale 2013）。

（２）また、ポールダンスはもともと夜のエンターテインメントであったにもかかわらず、現在はオリンピック競技を目指していることから、ポールダンスという一つのジャンルに相反しそうな夜の、すなわち大人のエンターテインメントと老若男女が挑むスポーツのどちらも包摂されていることがわかる。この側面を通して、現代日本社会におけるジェンダーとセクシュアリティを考えるための重要な切り口になった。先行研究を参考にすれば、イギリスでのポールダンス実践についての人類学的な研究（Griffiths 2016、Holland 2010）やアメリカでのストリップクラブに関する人類学的な研究（Egan 2006、Frank 2002、Hanna 2012）では、ポールダンス実践は女性のエンパワーメントなのか、搾取なのかが議論され、結局はそのどちらとも言えないほど複雑な実践であることが明らかになっている。現代日本でポールダンスの実践に取り組む男女について研究することで、エンパワーメントか搾取かという単純な二元論に陥ることを避けて、その身体経験に含まれている、矛盾しそうだが共存している様々な要素を検討できる。まず、ポールダンスの実践者がどのようにジェンダー規範やセクシュアリティに関するタブーに直面し交渉しているのかを理解することで、現代日本におけるジェンダーとセクシュアリティの現状について理解し、ポールダンス実践と同時に現代日本のジェンダーとセクシュアリティに関わる可能性について洞察を深めることができる。

（３）本研究では、申請者が身をもってポールダンスを実践することで研究の問題意識が生まれた。まず、ポールダンスではステンレス鋼の棒を登って重力に逆らう動きを披露することから、実践が著しく身体的であることがわかる。申請者はバレエやジャズ・ダンス、現代舞踊などを習得したダンサーでもあり、人類学者として現代舞踊とは異なる暗黒舞踏という身体的なパフォーマンスについて研究してきた。その研究では、暗黒舞踏の動きを作る過程で、踊り手は不可視の何かに動かされ、身体の生成変化が促される傾向があること、この中で踊り手の身体のみならず、踊り手の周囲の空間も変容することが明らかになった（コーカー 2017）。申請者がポールダンスに取り組み始めた頃、実践者の身体が急速に変化し、踊っている最中に周囲の場所も変わることが見えた。例えば、実践者がポール上に身体を真横に傾けたままのポーズをとっているとき、真横になっているポールダンサーの身体と共に練習の部屋の床も垂直に見え、ポールが地平線のように見えた。つまり、ポールダンサーの身体が変容すると共にその場所も変容するという可能性があり、学術的に言い換えれば情動と生成変化の現れを窺えた。まず、ポールダンスの動きによってどのようにこの変容がもたらされたのかを明らかにしたいと思った。そして、この問いを契機に、ポールダンスの身体経験を探ることで、情動論を切り口にした人類学における身体論を展開できると考えた。

（４）人類学における身体論というと、マイケル・ジャクション（1989）やトマス・ショルダッシュ（1994）、菅原和孝（2013）などのいう身体化論、カスリーン・スチュアート（2007）や西井涼子（2013）の情動論などが取り上げられる。特に、これらの理論では、人類学者自身が自らの身をもった経験を土台にある現象を検討しているアプローチが共通している。ただ、これらを含め、人類学の身体論においては、次の問題が貫いているとも考えられる。それは、身体経験における諸現象を言語化すればするほど身体的な要素が言説の隙間に落ちてしまう問題である。特に情動論に関して言えば、身体的な要素を示すために論述の抽象度を上げていくが、抽象度の高さゆえに身体経験の具体性を捨象してしまう傾向がある（コーカー 2017）。申請者は、ダンスなどの身体的なパフォーマンスは非言語行為だからこそ、この問題を超克し身体論を展開する上で重要であると考える。特にポールダンスの身体的な要素は他のダンスと比べて著しいため、身体論の新天地を切り拓く鍵となると考える。

引用文献

コーカー、ケイトリン 2017 『暗黒舞踏の身体経験—アフェクトと生成の人類学』京都大学学術出版会。
西井涼子 2013『情動のエスノグラフィ—南タイの村で感じる・つながる・生きる』京都大学学

術出版会。
菅原和孝（編） 2013 『身体化の人類学』世界思想社。
Csordas, T. 2004. Embodiment and Experience: The Existential Ground of Culture and Self. Cambridge University Press.
Egan, R. 2006. Dancing for Dollars and Paying for Love: The Relationships between Exotic Dancers and their Regulars. Palgrave Macmillan.
Frank, K. 2002. G-strings and Sympathy: Strip Club Regulars and Male Desire. Duke University Press.
Griffiths, K. 2016. Femininity, Feminism, and Recreational Pole Dancing. Routledge.
Hanna, J. 2012. Naked Truth: Strip Clubs, Democracy, and a Christian Right. University of Texas Press.
Holland, S. 2010. Pole Dancing, Empowerment, and Embodiment. Palgrave-Macmillan.
Jackson, M. 1989. Paths Toward a Clearing: Radical Empiricism and Ethnographic Inquiry. Indiana University Press.
Paul Dale, J. 2013. “The Future of Pole Dance,” Australasian Journal of Popular Culture, 2(3): 381-396.
Stewart, K. 2007. Ordinary Affects. Duke University Press.

２．研究の目的

本研究の目的は、ポールダンスの実践を情動的な人類学の手法で研究することによって、人類学における身体論を展開させることにある。まず、ポールダンスの先駆者との聞き取り調査を行い、性風俗のエンターテインメントであったポールダンスがどのように一般的なフィットネス、スポーツの競技、芸術的な表現の一形態として多様化してきたのかを明らかにする。そして、複数の種類のポールダンスを実践者と共に実践することによって、研究者が身をもってポールダンスの身体経験の内実を情動的な人類学の方法で明示する。明らかになった身体経験の内実をもって、人類学における情動と生成変化、場所、エロス、痛み、ジェンダーを巡る人類学的な理論を展開する。この展開のために、言語化のみならず、様々な発表形態を通して身体的なパフォーマンスを取り入れ、学術的な研究の方法および発表形態そのものを問い直した上で、新たな非言語的な研究分野を切り拓き、人類学の身体論の新たな転回を提示する。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために、日本国内の複数の現場でポールダンスの実践について参与観察と聞き取り調査に基づいた研究を実施した。具体的には、東京、大阪、京都、仙台、札幌、広島で、ポールダンスの動きが伝達されるスタジオ及びポールダンスが披露される会場で参与観察を行った。申請者は身をもって実践者と共にポールダンスをすることで、その身体経験に肉迫した。さらに、聞き取り調査を通して、ポールダンスのオーラル・ヒストリーや実践者の経験について理解を深めた。そして、申請者はポールダンサーや他のジャンルの表現者と共同制作をし、ポールダンスに基づいた舞台芸術の作品を演出・出演することによって、そのパフォーマンスを研究対象のみならず、研究方法と成果の発表形態としての可能性を示した。

４．研究成果

（１） ポールダンスの歴史的な変遷と将来の可能性

まず、ポールダンスのオーラルヒストリーを作成し、現状について把握した。ポールダンスのスポーツ競技の技の基本は、夜のエンターテインメントの場で発明されたことが明らかになった。つまり、ポールダンスを多様化させた先駆者たちは、夜のエンターテインメントとしてポールダンスを披露していた方々であった。そして、ポールダンスがスポーツ競技として規格化される際に、夜のエンターテインメントとしてのルーツがどのように抹消されたのかが明らかになった。この抹消があったにもかかわらず、若手の実践者がポールダンスの夜のエンターテインメントとしての可能性を切り拓くことで、日本におけるジェンダー規範とセクシュアリティの固定観念を揺さぶり、それ自体を多様化していることがわかった。また、スポーツ競技に出場する実践者は、舞台芸術や様々な実験的な表現にポールダンスを用いることもある。エンターテインメント、スポーツ、芸術というカテゴリーを行き来し、それぞれの境界線を撹乱し問い直すことで、その可能性が開かれることがわかる。その中で、一般社会にとってのジェンダーとセクシュアリティの規範をも問い直し、そのさらなる可能性を示していることが明らかであった。

（２） 夜のエンターテインメントのポールダンスが提示するエロス

夜のエンターテインメントのポールダンスへの参与観察を通して、ポールダンサーによって提示されるエロスを明らかにした。ポールダンスの披露にあたり、様々な身体技法を駆使し、ポールダンサーはたまに遭遇する観客の性差別的な態度を拒否するのではなく、むしろ観客を優しく包み込むという場面を目の当たりにし、考察した。考察のために田中雅一のいうエロスに依拠し、ポールダンサーのエロスは反エロスを持ち込む観客を拒否するのではなく、反エロスを含めそれらを包摂する力を有することを主張できた。つまり、本研究に協力した夜のエンターテイン

メントを披露するポールダンサーは、田中の言う真のエロスに相反するものに抵抗するのではなく、むしろ承認することによってその暴力性を無力にする能力を示したことが明らかになった。言い換えれば、彼女らのセクシュアリティは彼女らを弱い立場に押し付けるのではなく、彼女らがその場を誘導できる官能的な力となったといえる。申請者は彼女らの身体技法のこの能力を明らかにすることで、エンパワーメントか搾取かという二元論に陥る問題を超克した。言説では矛盾しそうな身体経験を明示することで、言説では到達できないような身体経験の内実を提示し、人類学の身体論に貢献できた。

（3） スポーツ競技としてのポールダンスにおける生成変化と情動

スポーツ競技としてのポールダンスへの参与観察を通して、身体的な実践と言説との相乗構成的な関係性に注目することで、生成変化と情動の過程を新たな観点から提示できた。特に「痛み」の経験を明らかにし、その痛みがどのように身体的な変容と自らの情動を駆り立てているのかを示すことで、ドゥルーズとガタリのいう生成変化に欠けている身体性を明示し、情動論を展開した。この研究成果を発表するために、言語化を用いるとともに、実践者のアザの写真をコラージュとして掲載することで、読み手の身体においてその情動を呼び起こす作用をもたらした。さらに、痛みの情動的な次元のみならず、逸脱行為と見られるポールダンスに取り組むことで、実践者がどのように一般社会のジェンダー規範から逸脱し、自らのポールダンス実践とジェンダー概念を取り入れ再領土化できたのかを解明した。この社会的な次元を考察し、情動を生成変化の複数の次元から明らかにした。

（4）芸術的な身体表現としてのポールダンスの可能性

本研究の一環として、ポールダンサーや舞踏家、音楽家などと共同制作をし、11 点のポールダンス作品を披露してきた。また、学術的な口頭発表の際には、踊りながら踊りについて述べるという形をとった。まず、身体的なパフォーマンスを通して言葉では表せない身体的な要素を提示できた。そして、次の作用が明らかになった。それは、身体を動かすことによって思考回路が回り、思考することで新たな身体的な動きが生まれてくるという循環であった。この身体的な実践と思考の循環を通して、身体的なパフォーマンスと言葉が切り離せないほど、お互いに触発し合って相互に構成しているという過程を理解し、観客に提示した。そして、循環が続く中で、発表した身体的なパフォーマンスが、申請者にも観客にも新たな言葉を生み出す作用をもたらした。言語的な思考法と発表形態にとっても非言語的な身体経験とその活用の重要性を提示した上で、論文や書籍などの言語化された形態と同様に身体的なパフォーマンスとしての研究成果の発表形態を評価すべきことを主張した。これは人類学の身体論にとって必要な新天地を切り拓き、さらには次第に身体が希薄になりつつある現代にとっても貴重な示唆となると考える。

引用文献

田中雅一 2010『癒しとイヤラシ―　エロスの文化人類学』筑摩書房。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 CAITLIN COKER ケイトリン・コーカー	４．巻 15
２．論文標題 Theory a Body Can Do: Bruises, Becomings, and Affects in Pole Dance	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Journal of Applied Ethics and Philosophy	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 ケイトリン・コーカー	４．巻 86
２．論文標題 「しぬかも」―ポールダンス実践で情動を体現させる生成変化	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 617-634
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 Dancing Eros: Ethics of a Pole Dance Bar in Southern Osaka
３．学会等名 American Anthropological Association 2021 Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 What happens when Becomings and Stainless Steel meet: the fusion of body and pole
３．学会等名 Art/Research/Practice(A/R/P) 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 How to become something else: butoh practice and affective ethnography
３．学会等名 European Association for Japanese Studies (EAJS)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 『しぬかも!』:ポール・ダンスにおけるフィーリングと想像力を巡って
３．学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 生成変化の地図
３．学会等名 「描かれた動物」の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して
４．発表年 2020年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 人類学を踊る／踊る人類学
３．学会等名 京都人類学研究会七月季節例会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 ケイトリン・コーカー
２．発表標題 Privileged/Othered Bodies in Japan: What can our bodies do?
３．学会等名 Informasia #11（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Fabienne Ankaoua, Caitlin Coker, Suzanne Ferrires-Pestureauなど	４．発行年 2022年
２．出版社 Editions In Press	５．総ページ数 224
３．書名 La douleur a loeuvre-- Corps, art, folie	

１．著者名 石井　美保、岩谷　彩子、金谷　美和、河西　瑛里子、神本秀爾、山本達也、中屋敷千尋、ケイトリン・コーカー、熊田陽子、山田仁史、川村清志、砂川秀樹、馬場 淳、深海菊絵、田中雅一、濱野千尋	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 296
３．書名 官能の人類学	

１．著者名 Kajimaru Gaku, Caitlin Coker, Kazama Kazuhiro	４．発行年 2021年
２．出版社 Trans Pacific Press	５．総ページ数 204
３．書名 An Anthropology of Ba: Place and Performance Co-emerging	

1．著者名 山口未花子、ケイトリン・コーカー、小田博志	4．発行年 2023年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 228
3．書名 生きる智慧はフィールドで学んだ 現代人類学入門	

1．著者名 吉開菜央	4．発行年 2021年
2．出版社 WHITE LEOTARDS	5．総ページ数 88
3．書名 映画『Shari』アーカイブ・ブック	

1．著者名 宮入 恭平、増野 亜子、神保 夏子、小塩 さとみ（編）	4．発行年 2023年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 256
3．書名 コンクール文化論-- 競技としての芸術・表現活動を問う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ポールダンス作品の発表：
2023年12月17日に北海道大学学術交流会館の小講堂にて「ペデすたル」という作品を披露、2023年3月4日に京都祇園Stinboatにて「We are ポールダンスの黄金時代」というイベントを主催し無題の作品を披露、2023年1月18日に札幌市のシーソーボックスにて「Dance Live Session Ward 踊（dance）x 音（music）x 場(ward)」というイベントに無題の作品を披露、2022年9月4日にグランド・サロン・十三にて「Cafe Panic Rabbit 84」というイベントに無題の作品を披露、2022年6月12日に北海道大学学術交流会議の小講堂にて「頭上のわたし」という作品の中に無題の小作品を披露、2021年12月4日に札幌コンカリニョにて「冒涜の八月」という作品に無題の小作品を披露、2021年10月16日に国際ポールコンベンションにて「Tansan」という作品を披露、2021年9月23日に小樽市立美術館にて「小樽晩夏光」という作品の中に無題の小作品を披露、2021年7月11日にポールスポーツ協会のオンライン大会にて「The Centaur-Unicorns meet the Ghost Witch」という作品を披露、2020年3月3日に京都アーバンギルドにて「Plankton」という作品を披露。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関